「五本骨扇に月丸」の佐竹氏家紋

連載

常陸時代の佐竹氏
― 500年の軌跡を追う ―

【第8回】

雌伏の時代を生きる

鎌倉の「佐竹屋敷」跡

神奈川県鎌倉市。JR鎌倉駅で下車し、東口へ。歩いてバスターミナルを抜け、正面の通りを経て「若宮大路」へ出る。同駅を背にして左方向に行けば、鶴丘八幡宮。右方向に進めば佐竹屋敷があった大寶寺方面。JR横須賀線のガード手前で若宮大路から分岐し、厨子方面に向かう道路へ出る。大町の商店街を過ぎ、「名越」の十文字路を左へ曲がる。わずかに上り傾斜の道を行くと、住宅街の一角に山を背にした大寶寺にたどり着く。

入口に「佐竹屋敷跡」の石碑が建っている。そこにはこう書かれている。「此所ハ佐竹四郎秀義以降代々ノ屋鋪（敷）跡ト云フ　昔當所ニ佐竹氏ノ霊社アリシガ後年村内天王社ニ合祀ス　後ノ山ヲ佐竹山ト呼ブ　其ノ形扇ノ地紋ニ似テ中ニ二本ノ疇アリ左右ヲ合テ五本骨ノ如シ」。最後に「昭和七年（1932）三月建　鎌倉町青年団」とある。文中の「天王社」は近くの八雲神社を指すと言われている。

文面は、江戸時代に書かれた地誌『新編鎌倉誌』（白石克編、平成１５年汲古書院発行）記載の「佐竹屋敷」の記述「名越道ノ北、妙本寺ノ東ノ山ノ疇アリ、其の下ヲ佐竹秀義ガ舊宅ト云」に基づいているようだ。屋敷跡（約２ヘクタール）周辺に家臣も多少住んでいたのではないか、とみられている。寺の話では「江戸時代に火災に遭って資料はない」という。

二重構造

碑文にある佐竹秀義は、奥州平泉、藤原泰衡討伐の「奥州合戦」に参陣し、源頼朝の御家人になった佐竹氏四代当主。「秀義以降代々ノ屋敷跡」とあるが、秀義以降、各代の当主は、何代までこの佐竹屋敷に居住していたのであろうか。金砂合戦後の公家の日記に「佐竹ノ一党、三千余騎、常陸国内ニ引キ籠リ」とあるように、かなりの数の郎等（家臣）が常陸国北部を中心に隠れ潜んでいた、とみられている。

当主は鎌倉の佐竹屋敷。多くの家臣は常陸国内。となれば双方の連絡は不可欠である。いわば司令塔は鎌倉にあって、いざという時の戦闘部隊は常陸国にいる。いわば二重構造の変則的な仕組みになっていた、と考えられる。しかも、かつての領地であった常陸国北部は、金砂合戦に勝利した源頼朝麾下の武将たちに恩賞として分け与えられている。「引き籠り」という表現はこうした実態を反映した言葉といえるだろう。

従って歴史に記録された佐竹氏の事績は、源頼朝を始めとする鎌倉幕府の征夷大将軍に仕える御家人としての活動が中心となる。例えば同将軍が神社仏閣に参拝する際や京都に上る時の随行などが主な仕事である。それ以外で、この時期、佐竹氏が歴史に登場する出来事は「承久の乱」である。征夷大将軍源頼朝・頼家・が亡くなった事から朝廷が武士から権力を奪還しようと、京都を舞台に戦いが繰り広げられた。

「承久の乱」の恩賞

実朝後継の将軍選定をめぐって幕府と対立を深めていた後鳥羽上皇は、承久３年（１２２１）、１４ケ国から軍兵を集め、鎌倉幕府を掌握していた北条義時追討の宣旨を発した。これに対し幕府側は１５ケ国の後家人に出陣を命じ、わずか数日で朝廷軍を撃破した。佐竹氏は秀義嫡男義重、弟義茂らが出陣、手柄を立てた。軍功を挙げれば恩賞がついてくる。それに関連するかどうか、日本の初期系図集『尊卑分脈』の佐竹秀義の注書きに次のような記述がある。

「隆義子、美濃国山田郷地頭職始而拝領、佐竹別当」とある。文中の「山田郷」は山口郷の誤り。一般的に「美濃国山口郷」の「地頭職拝領」は承久の乱における佐竹氏の手柄に対する恩賞とみられてきた。しかし、『佐竹家譜』の秀義説明書きに美濃国山口郷地頭職拝領の記述はない。美濃国と関係する記述は秀義三男季義の注書きにある。

「其子孫世々宗主に代て或は京師に在て朝廷を守護し、或は鎌倉に在て幕府に仕え、其勤労に因て別に采邑数郡を濃州に賜ふ」とある。

『佐竹家譜』に出てくる濃州は美濃国の呼称。その「数郡」とは、美濃佐竹氏が支配した「山口郷」や「上有智荘」を指している、とみられる。筆者は、奥七郡（茨城県北部地域）の一部・「酒出」を二つ分けて南酒出氏、北酒出氏が誕生していることから「承久の乱」の恩賞の地は、金砂合戦で失った奥七郡の一部・「酒出」と隣接する「額田」、それと佐竹氏ゆかりの勝楽寺があった「増井」ではなかったか、とみる。

佐竹秀義の執念

波乱の人生を歩んだ佐竹秀義は、嘉禄元年（１２２５）に亡くなった。『佐竹家譜』は、同年１２月２２日条で「遺骸常州に下着」、同２４日条で「大瑞山勝楽寺（大田郷増井）に葬る。道号香山、法名蓮実。秀義述職懈たらず、旧領本の如くに得」と書いている。「述職」とあるので、佐竹氏が果たしてきた役割などを上の人に懈たることなく、熱心に話してきた、ということか。その甲斐あって旧領を取り戻した、とも読める。

「旧領本の如くに得」とある「本」は元とも読める。旧領とは、失った「奥七郡」すべてを指すのか。それとも、佐竹氏ゆかりの勝楽寺があった「増井」など一部地域を指すのか。いずれにせよ秀義の「述職」によって秀義の時代に失った「旧領」を「本」の如くに「得（た）」ようである。亡くなった秀義の遺骸を「増井」の勝楽寺に葬ることができた、という事がそれを如実に証明している、といえる。

『佐竹家譜』の記述を見ると、秀義氏は「承久の乱」に参陣した他の武将たちと異なり、何よりも金砂合戦で失った「奥七郡」の失地回復を願ったのであろう。それは容易に想像できることである。上記、秀義の「述職」のなかには、多分にその失地回復に対する強い思いが込められていたのではないか。先祖代々の領地を自分の代で失った以上、秀義は生きている間に「本」の状態に戻して、子に引き継ぎたいと願ったのであろう。

在地名を名乗る一族の誕生

秀義亡き後は嫡男義繁（以下義重）が佐竹氏五代当主となった。『佐竹家譜』等によると、義重は「常陸介」の官職を得ている。その義重の時代、鎌倉での佐竹氏の活動は、義重の弟、季義が頻繁に登場している。文暦２年（１２３５）６月２９日条に「明王院供養、将軍頼経参堂。八郎季義、後陣の随兵に列す」（『佐竹家譜』）。嘉禎４年２月１７日条に「頼経上洛。季義及び六郎次郎義行（義茂の子）随兵ニ列す」（『同』）などである。

それではこの間、当主の義重はどうしていたのであろうか。残念ながら義重を始め、六代長義、七代義胤の事蹟は、あまり記録に残っていない。ただ、これら各当主は、四代秀義が回復した「旧領」に拠点を持っていたと考えられる。筆者は秀義が失地回復した「旧領」は「酒出」、「額田」、「増井」とみている。秀義の時代、奥七郡全域を回復したとは考えられないので、義重以降の当主は、これら３地域を足掛かりにさらなる失地回復を目指して活動していたのではないだろうか。

それは各当主の子どもたちの動きからもうかがえる。義重の子義直は取り戻した「額田」に城を築き、額田氏の祖となった。同じく子の義高は岡田（常陸太田市）に入って岡田氏を名乗り、『佐竹家譜』は同じく子の「常陸四郎義澄、真崎の祖」と記している。同じく義綱は鎌倉幕府六代将軍、宗尊親王から陸奥国菊田郡泉田郷を賜り、岡部山に城を築き岡部氏の祖となった。このように在地の地名を氏とする佐竹氏一族が次々に誕生し、在地勢力と結び付いた失地回復が始まったのである。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
冨山 章一

後方に「佐竹山」と呼ばれた山を背にして「佐竹屋敷跡」の石碑が建つ大寶寺＝神奈川県鎌倉市大町３丁目